東京湾の多様な利用とその社会的意義について

VARIOUS USES OF TOKYO BAY AND ITS SOCIAL VALUES

鈴木覚[1]・磯部雅彦[2]

Satoru SUZUKI ,Masahiko ISOBE

[1]学生会員　東京大学大学院新領域創成科学研究科（〒277-8563　千葉県柏市柏の葉 5-1-5）

[2]フェロー　工博　東京大学大学院新領域創成科学研究科（〒277-8563　千葉県柏市柏の葉 5-1-5）

More than twenty million people live in the shed of Tokyo bay. The coast of bay is the place to live, work and play. Tokyo bay is also a source of valuable resources. Suzuki(2007) et al. have estimated the economic values of the ecological services in Tokyo bay and showed traffic and logistic values are higher than fishery and the recreational value. But in this paper the "Intrinsic value" is estimated by benefit transfer method that the value is transferred from the other coastal area's values estimated by stated preferences method. In these studies respondents do not understand exactly what it is, they are asked to value (or vote upon) and must accept the scenario(of the service of Tokyo bay) in formulating their responses. So we have to study exact scenario of ecological service that Tokyo Bay has brought the regional society. We study the characteristic of Tokyo bay use in this paper. Moreover, we study the importance that the ecology of Tokyo bay is artistic and social in significance for the coastal communities.

Key Words： *Coastal community, social value , nature restoration ,ecological service*

1．はじめに

沿岸域の自然の価値や重要性は，従来経済便益または価値として環境経済学的手法により計測され，評価されてきた．鈴木(2007)[1)]は，東京湾における生態系サービス（水産生物生産，浄化，リクリエーション等）の経済価値および生態系の存在価値等について，代替法，旅行費用法および便益移転法により評価した．さらに港湾物流の便益等についても検討し，生態系サービスが提供する便益に対して，港湾等産業的な利用の便益が極めて大きいという結果を得た．また，経済便益として評価し得ない社会的な重要性など非経済的な価値についてもより詳細に検討する必要があることを示した．

東京湾の社会学的な研究については，漁業権放棄に伴う地域コミュニティの変遷[2)]，コモンズの帰属問題としての東京湾の環境保全に関する研究[3)]などがある．前者は埋立と漁村集落の衰退過程を詳細に分析し，後者は東京湾の自然環境を公共財として保存すべきものという立場で，東京湾の埋立の経緯を漁村の視点から分析している．また，東京湾の沿岸域における人々の様々な活動や海辺の自然の現状についてはマスメディアが取材[4),5)]し，沿岸地域に特有な文化の存在を示唆している．これらの研究や報告では，その様々な利用を通じて評価されるべき社会的な重要性や意義，精神的な価値についての議論はほとんどない．

本研究は，東京湾の今日の沿岸都市社会における役割や重要性などを明らかにすることを目的として実施したものである．既往文献資料や現地調査・ヒアリング，活動への参与的な観察等を行ない，東京湾の利用特性を把握し，従来社会的効用として認識・評価されてこなかったコミュニティの形成等の社会的意義や利用者にとっての精神的な重要性について分析・検討した．

2．研究の方法

研究は以下の手順により実施した．

(1) 東京湾の多様な利用の変遷

既存文献資料に基づき東京湾の利用の変遷を整理した．

(2) かつてのくらし

多摩川河口羽田地域を事例として地域住民の聞取りを行ない，くらしと地域社会の特性を分析した．

(3) 現代の東京湾利用の特徴

近年活発化している東京湾沿岸の市民活動について参与観察を行いその特性を分析した．

(4) 考察

東京湾利用の特性についてかつてと今日との相違を明確にしつつ，現代利用の動向から東京湾利用の社会的意義や海辺の重要性について考察した．

3．東京湾の多様な利用の変遷

一般に海の利用として考えられるのは，海洋生物資源利用（漁業），海水資源利用（塩田等），空間利用（海上交通や用地造成など）がある．東京湾利用の歴史は古く，鬼頭[6]によれば縄文前期の南関東の人口は日本国内で最も多く，湾岸にも多くの人々が生活していたと考えられる．当時の利用は魚貝類資源利用が中心であり，湾岸に残る数多くの貝塚遺跡は当時の東京湾利用の豊かさを示している[7]．

中世には塩田や漁業資源利用のほか，東京湾の海上交通が活発になり，漁民は海上輸送を担い，水軍としても徴用された[8]．

近世に入り東京湾は，**図-1** に示すように生物資源利用（肥料，専業漁業，副業，レクリエーション），海水資源利用（塩田），空間利用（都市，新田，ゴミ処分等の埋立，海上交通）など多様に利用された．特に，漁業としての利用が発達し，地先は海岸に接する村の専用漁場，沖合は沿岸漁村の入会漁場として利用され，文化の議定書に見られるような共同管理体制が存在した．各地域の郷土史等の資料から近世の漁家数は５千戸以上あると推定された．また，漁業は江戸前の食文化を生み出し，江戸名所図絵に描かれているように釣りや汐干狩りが行なわれ，東京湾の生態系資源は人々の生活に潤いをもたらしていたと考えられる．海藻（バンドウアオサ）や雑魚貝類等は肥料として利用され，里山のない磯付の村にとってきわめて重要なものであった．明治初年にはこのアオサ肥料をめぐり羽田猟師町と大師村で深刻な漁場争議が発生している．

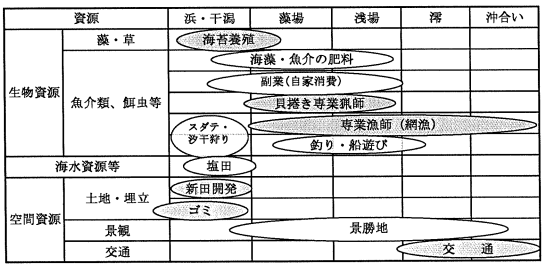

図-1 近世の東京湾利用

近代の利用状況を**図-2** に示す．重要であった肥料としての利用は化学肥料の普及と共に減少し，塩田は大正期に姿を消した．代わりに，近代工業と貿易の発展が国家的な課題となり，港湾の整備のため干潟を浚渫し航路を開き，浚渫土砂を用いて，工業用地や発展する街づくりのための埋立が進められた．

次に，現代の利用を**図-3** に示す．明治以降海苔養殖を初めとして漁業も発展し，東京湾沿岸府県の統計資料[9)10)11)]によれば，漁業者は明治末年には25,000戸を超えた．しかし，横浜港整備，京浜運河整備，東京築港などにともなう開発により沿岸漁業は放棄を迫られた．また，水質悪化ともに東京湾の漁場は狭まり，人々が海辺と親しめる場も減少し，生物資源への関心は薄れていった．

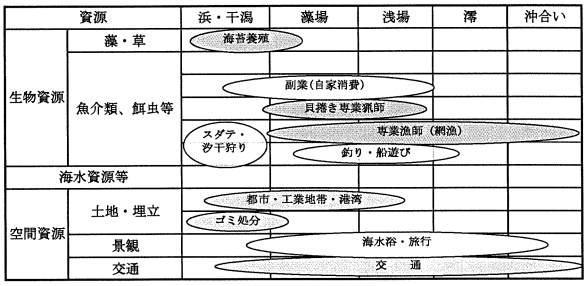

図-2 近代の東京湾利用

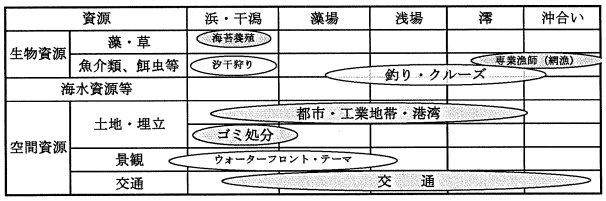

図-3 現代の東京湾利用

4．かつてのくらし

戦前から高度成長期前までの東京湾の暮らしについて，羽田および川崎市大師河原の人々に聞取りを行なった．その中で，海の豊かさを実感しながらも危険で厳しい生業を通じた“くらしの充実感”があったこと，また海の自然を媒介にして重層的で強い“人と人とのつながり”が地域社会にあったことが明らかになった．

(1) 生活の充実感

生活の充実感は，東京湾が豊かな海であったこと，しかしながら危険と隣り合わせながら，自らの工夫と努力とそれによって得られる成果は単に経済的な価値にとどまらず「生活の充実感」といったものがあったものと考えられる．

a) 豊かな海

岡村[12)]は海苔養殖を随分つらい仕事であるから，割でも良くなければ引き合わないとしており，明治38年頃の大森海苔漁業者の売上を350円，利益を約122円程度と見積もっている．明治18年の渡辺東京府知事巡察日記によれば羽田周辺の漁師の収入は300円であったという[13)]．明治20年前後の平均的国民所得の約３～７倍の収入である．

こうした海辺の豊かさは地域の人々の次のような発言にも読み取れる．

「戦後は工場も焼け仕事もなかったが，海に出れば生活ができる有難いものだった．」（羽田Ｉ氏）

「夜中に海苔を盗む海賊が来た．海苔網は海にお札

を浮かべているようなものだ.」(川崎K氏)
「羽田小学校の講堂を建てるために，海苔の養殖場権利を貸した収入を当てた.」(羽田Ｉ氏)

b) 漁獲の不安定さと危険性

戦前の漁獲量の推移を**図-4** に示す. 漁獲高は時として大きく落ち込むなど安定していない. 横浜柴村ではみこしを担ぐときに「あしたあにゃあど」という[14]. 明日は分からないという不安定な漁業の日常を言い表している. また，海苔は昭和の中ごろまで“運草”といわれ，豊作・不作の変化が大きいことを意味した.

作業の危険性について次のような元漁業者の発言がある.「海は板子一枚下は地獄というが本当に危険だった.」(羽田Ｓ氏)

また，昭和 16 年には海苔採り作業中，大突風が起き，大森・羽田で 46 名の犠牲者を出した[13].

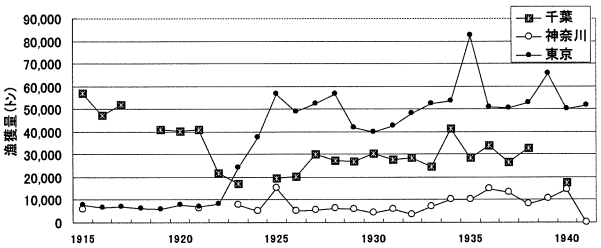

図-4 戦前の内湾漁獲量の推移（各府県統計書より）

c) 生活の充実感

海での仕事には以下のような発言に見られるように様々な工夫や努力を惜しまなかった.
「打たせは東京湾の入会であり，自分の才覚でどこに魚がいるかを見つける必要があった.」(羽田Ｉ氏)
「網ヒビへの転換でどの段にノリが付着するかの研究に心血を注いだ結果，誰でも出来るようになった.」(羽田Ｉ氏)
「昔夫と漁に出た日々が懐かしく毎日海を見に来る. もう一度漁をしに海に出たい.」(羽田Ａ氏)
「くじ引きで海苔柵場が決まるため，漁場の場所ごとに水温や潮の流れなどの情報を細かく調べておき，場所に応じてヒビの張り方を決めた.」(川崎K氏)

こうした努力を真冬の海苔採りのような厳しい作業の合間に自ら進んで行っていることや，その語り口から経済的利益追求だけでは説明できない何かを感じることができた. それは「生活の充実感」であると考えられる（後述するように里川等の類似事例からも精神的価値の存在が推定できる).

(2) 地域社会のつながり

海辺の生業は家族，親類，共同作業体，組合等重層的な人と人とのつながりを育み，仕事や生活上のリスクを軽減し，人々の精神的な支えにもなり，祭りなどの地域文化を生み出してきた.

a) 組合でのつながり

「横浜柴町では，漁協に青年会を結成し，教育活動，奉仕活動，銭湯経営，アサリ養殖事業などを共同で実施した.」[14]

b) 生業における共同体“もやい”

「海苔養殖は“もやい”という仲間での共同作業だった. 海苔ヒビ場が同じ場所になるようにくじも一緒に引いた. 生活面でも協力した.」(羽田Ｉ氏)

c) 他地区漁師とのつながり

「父は若くして一本立ちしたので，技術を子安の漁業者から漁具の借り，仕立て方や引き方など教わって腕を上げた. 子安の人たちとは，父が亡くなった今でも交流を続けている.」(羽田K氏)

d) 近所・地域のつながり

「“めし，あんかぁ”と声をかければ“おう，あんよ”と，お鉢ごと持ってくる.」[15]

そのほか，漁獲物の仲買人との関係や祭り，学校行事等では町会内の強い団結があった. 地域の人々の社会的なつながりを**図-5** に示す.

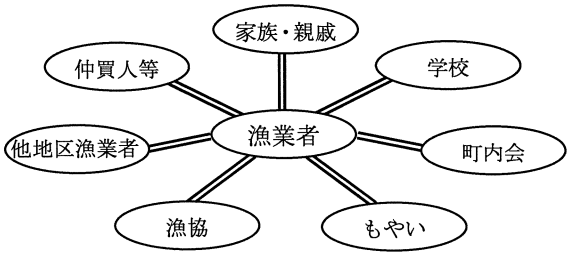

図-5 漁業者の社会的つながり

また，子供たちは**図-6** に示すような縦と横の関係を築きながら成長した.

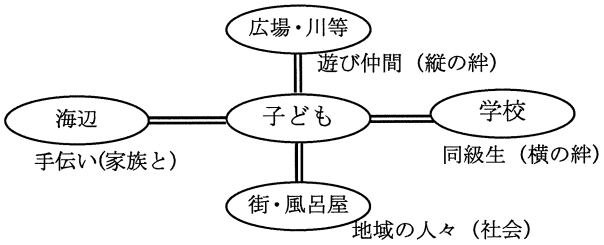

図-6 子どもの社会的つながり

e) 学校と地域の関係

「戦後は学校も焼け場所も無く，地域と協力して３部授業をやった. また，学校に来ない子供には，授業終了後に家庭訪問して教えた.」(羽田Ｊ氏)

f) 広場などでのつながり

「川などの危険な場所は上級生が教えた. 広場に行けば，誰かしらいて遊べた.」(羽田H氏)
街での大人たちとのつながり
「風呂屋には，職人さん，漁師さん，劇場の俳優さんなど，いろんな人がいて，騒いでいると怒られたりした.」(羽田小同級生会の文集より)

g) **家族のつながり**

「父と一緒に海苔取り作業を手伝ったが，枝ばかりで仕事が増えた.」(羽田Ｉ氏，Ｌ氏)

「父とアサリ採り（生業）に行き，カレイを見つけて得意顔だった.」(川崎Ｋ氏)

以上のように海辺の生業を通じて，家族や地域の重層的なつながり・ネットワークが形成されていた.

５．現代の東京湾利用の特徴

(1) 様々な東京湾利用

戦後，東京湾は自然利用中心から産業（工業・物流），都市（商業・業務）利用が中心になり，**図-7** に示すように 1950～1980 年代に東京湾は大規模に埋め立てられた．沿岸開発に対し，漁業者は当初開発反対の陳情活動(例えば 1959 年の大森漁協による大井埠頭土捨て反対の陳情など）を行ったが，やがて漁業権補償交渉に転換していった.その背景には，経済発展のためという国策事業であること，昭和 30 年代から急速に悪化した水質汚染で漁業が事実上困難になりつつあったこと等がある[16].

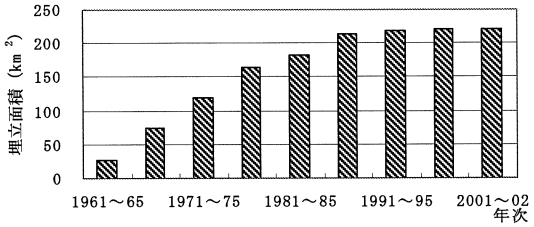

図-7 埋め立て面積の推移[18]（東京湾全体）

羽田地域では，多くの人々は漁業権放棄後の転業は成功しており，地域の人々の絆はその後も続いたという（羽田Ｉ氏）．しかし，親密なコミュニティは漁業という機能的必要性を失い，アーバニズムにともなって相互依存は都市的なサービスに置き換えられ[17]，地域の紐帯は薄まっていった．地域コミュニティの衰退をワンルームマンションの建設になぞらえて，「あの縦の長屋（マンション）は良くない．長屋は横でなくては」,「暮らしにくくなってきたなあ」（羽田Ｉ氏）という言葉にそれが表れている．

近年，経済は第三次産業化が進み東京湾沿岸の工業地帯は遊休地化した．都心に近接する沿岸部の未利用地は職住近接の業務空間やテーマパークとして再開発された．埋立地に忽然と出現した都市空間は来訪者で賑わっている．しかしそれは歴史的にも，空間的にも連続性が乏しく，社会との関連性を排除し空間的に内閉されたものであるといわれている[19]．街は海やその地域の歴史伝承から切り離されている．また，沿岸に新たに居住し始めた人々は，新たなコミュニティづくりを模索しているという[17].

近年，**表-1** に見られるように東京湾の沿岸への関心が高まりつつある．本表は沿岸での活動を 1990 年代の新聞社の取材[4),5)]から抽出したものである．

東京湾の利用は，生き残っている伝統的な漁業や食文化，一層の都市化に向かう工事風景，非日常的な港湾倉庫群を活用した新しい文化の発信，マリンスポーツや環境を保全する人々の活動など多様に海辺と関わっている人々がいることがわかる．

表-1 東京湾と人との関わり

利用区分		生業	レクリエーション	都市	産業
自然	生物	アナゴ漁，まき網漁，シャコ漁，アオヤギ漁	ハゼつり		
			様々な魚介類の紹介，熱帯魚，外来種等		
		海苔の天日干し復活	鯛について		
			江戸前料理の紹介		
	その他自然		多くの市民活動（河川・河口）	お台場の自然	
			人工海浜造成		
空間		海辺で働く人々（税関，船頭，パイロット，トレーラー運転手，保安官，麻薬探知犬，築地，航海士）	ボードセーリング，水上バス，クルージング船	夢の島，若洲海浜公園，臨海副都心，幕張副都心，汐留再開発，MM21	コンテナターミナル
			ベイサイドマンション（住居）		レインボーブリッジ工事，新海面埋立，海老取川可動橋工事，羽田沖合い展開，海老取川可動橋の工事
			倉庫利用ライブハウス，ロフト文化，宗谷の展示，芭蕉の道、サイクリングロード，湾岸ロケ	佃島の暮らしと高層マンション	
				コンベンション競争	湾口道路計画
社会的活動		メバル放流	湾岸マップ	埋立反対運動	
		帰化植物調査	環境を保全する活動	埋立地の帰属問題	
		ハゼの孵化研究	東京湾漁師コミック，海から見た絵画個展	市民によるゴミ回収活動	
		密漁船追跡	パラグライダー，ダイビングプール		

しかし，**図-8** に示すように漁獲量は低下し，生物資源の利用をめぐって相争ったようなかつての濃密な生物利用はすでになくなっている．

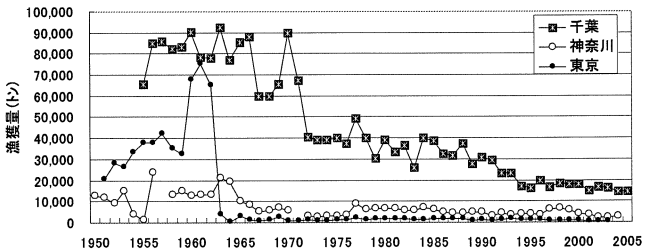

図-8 戦後の漁獲量の推移(農林水産統計資料より)

以上，都市化にともなって多様な利用は見られるが，東京湾の自然や生態系の利用は減少し，人と人とのつながりは弱まりつつあるものと考えられる．

(2) 東京湾利用をめぐる新たな動向とその特徴

1970 年代以降入浜権運動を始めとする埋立反対運動が，兵庫県の甲子園浜海岸や東京湾の三番瀬など各地で展開されたようになった[3].

1980 年代に入ると，海を巡る２項対立的な争いよりも，直接海と親しみ，きれいにしようと行動する市民が出現するようになった．

表-2 は，東京湾沿岸で活動する市民団体のいくつかを挙げたものである．これらの団体の多くは 1990 年代以降に設立され，自然観察や海の環境保全活動など日常的な海とのふれあいを求める活動がこの時

期から活発化したこと示している．

例えば，横浜の「海をつくる会」は横浜の海底にゴミが大量に捨てられていることに気付き，1981 年に横浜港山下公園の前の海底清掃を始めた．毎年の参加者は 200～300 名である．

また，盤州里海の会は「海が限られた漁師だけのものではなく，多くの市民が豊かになれる海を考え行動すること」を目的として 2004 年に NPO を設立した．会の設立趣旨は「これからの漁業が単にとるだけの不安定な漁業を脱して，東京湾の恵みを生かした豊かで魅力ある生業」を目指し「単に環境保護ではなく，人間が生活し，自然が守られ，お互いが共存できる海！」となっている．

表-2 東京湾沿岸で活動する市民団体

番号	団体名	設立年代
1	磯遊び研究会	2000
2	海をつくる会	1981
3	NPO法人海洋塾	2001
4	NPO法人海辺つくり研究会	2002
5	NPO法人よこはま水辺環境研究会	2000
6	呑川の会	1997
7	夢ワカメワークショップ実行委員会	2002
8	リトルターン・プロジェクト	2001
9	金沢八景－東京湾アマモ場再生会議	2003
10	たてやま・海辺の鑑定団	1997
11	東京港グリーンボランティア	1990
12	NPO法人三番瀬環境市民センター	1991
13	かわさき・海の市民会議	2000
14	NPO法人東京湾干潟保全・再生フォーラム千葉	2004
15	盤洲干潟をまもる会	1987
16	日本野鳥の会・千葉県支部	1934
17	よこすか海の市民会議	1995
18	横須賀「水と環境」研究会	1988
19	NPO法人川崎海の歴史保存会	1999
20	オーシャンファミリー	2006
21	SAVE21	2000
22	盤州里海の会	2004

横浜の様々な市民･団体で結成している金沢八景-東京湾アマモ場再生会議は，①アマモの花枝採取，②種子の選別，③種子を海に撒く作業，④移植する苗を作るための苗床づくり，⑤苗の移植会，⑥植えた苗のモニタリング観察会等を実施し，毎回数 10～300 人が参加する．そのほかに，活動報告会（フォーラム等）や地元小学校での出前授業などを行なっている．これらの活動の様子を**写真-1** に示す．

活動に参加する市民は，公務員や会社員，自営業者，地元の漁業者など様々な職業につく人々であり，学生や小学生など幅広い年齢層の人々が，コミュニケーションをとりながら作業を楽しんでいる．

アマモ種子の選別

アマモ苗の移植

写真-1 アマモ再生会議の活動

また，会員相互のメール交換の内訳を**図-9** に示す．活動する会員は活動上の連絡だけでなく，生活情報の交換や相談など多岐にわたった会話がメール等の電子媒体により行っている．ある団体では，1ヶ月間に会員の約半数の 35 名がメーリングリストに投稿し，その件数は 273 件で，そのうち事務的な連絡は約半分で，活動上の様々な会話や生活情報の交換やプライベートな話題などもあった．

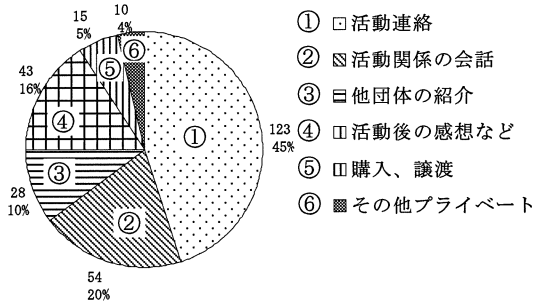

図-9 メーリングリスト投稿内容別頻度

会員のＳ氏はこの団体に入った理由として「規則が緩やかで拘束されないこと」を挙げていた．また，別の団体では「緩やかな連携」を活動理念の一つに挙げており，だれでも参加できるように会員を拘束するルールはあまりない．

一方で，活動に参加できない会員に対し「打ち上げに来ませんか？」と呼びかけ互いの交流に心を配っており，**写真-2** のようなイベントの打上げなど親密な紐帯を目指している．

写真-2 親密な紐帯を目指す打上げ会

別の団体では，小学校の先生が「ＡさんやＢさんたち（再生会議会員）が来てくださったこと，そしてそういう方たちとつながっていることはとてもありがたいことで大切にしたいことだ」と地域や活動の参加者とのつながりの重要性を語っている．

こうした活動へ参加者からは，「家族の会話が増えた」，「食べられるイベントは参加の楽しみがあり，続けて参加したくなります．」，「身近な海，ただ見ているだけの海が生命を育む海だったということを改めて思った．」，「このような活動を通じて環境問題に興味を持つことは大切であり，子どもたちの将来にも大きな影響を与えると思います．」といった楽しい，意義深いという感想が寄せられている．

以上から，これらの環境活動は第一に活動が楽しい，意義深いと言った精神的な糧を得るためのものであること，第二には拘束は緩やかながらも人と人とのつながりを求めていることが分かる．

6．考察

聞取り調査の結果，かつての東京湾での生業は第一に仕事は厳しく成果は不安定であるが，海の豊かさを実感でき，充実した生活（非経済的価値）があったこと，第二には生業を通じて家族や地域の人々と強い紐帯が結ばれていたことが分かった．

鳥越ら[20]は「里川の意味として，「生活の充実」の増加をめざした利用という側面をもっている」と述べ，鬼頭[21]は里山等における作業を「遊び仕事」と呼びその重要性を示し，自然を媒介とした生業や暮らしに非経済的な価値の存在を認めている．東京湾の生業には，こうした里川や里山等の自然を相手とする生業に類似した側面があり，本研究で推定したように海辺の生業活動に非経済的価値や「生活の充実感」の存在を示すものと考える．

高度経済成長期以降都市化が進行するとともに，沿岸地域社会の紐帯は薄れつつあり，また生態系等の利用も減少した．フィッシャーは「アーバニズムは下位文化を生み，下位文化は特徴的な近隣社会を創造し，その集団内で親密なつながりが生まれる．」と述べ，アーバニズムは「(人々の帰属ニーズに応えて様々な準拠集団を生み出すので)，人々の孤立化や精神的崩壊は生まない」としている[22]．一方，人と人とのつながりであるコミュニティや社会関係資本が近年衰退しつつあると報告する例[23]もあり，高橋は「個人の価値や生活を大切にしつつ，準拠集団にも所属可能である(孤独でない)という新たな社会的な要請」がある[24]としている．このように，都市社会には，コミュニティの衰退や個人の孤立化についての議論はあるものの，少なくとも人々は何らかの準拠集団に帰属し，親密な絆の中で暮らしたいというニーズが強く存在しているものと考える．

こうした中で，1980年以降新たに始まった市民団体等によるつながりは，束縛性は緩やかながら，ITを通じたバーチャルなコミュニケーションと海辺に集まり協業するというリアルな体験を通じてさらに広がりをみせており，親密な紐帯も生み出している．これらのことは，東京湾の自然が，沿岸地域社会のコミュニティ再生や人々の親密な紐帯の形成のための媒介として機能を持っていることを示すものと考える．

東京湾を総合的に管理するためには，上述したような海辺の自然空間が果たすべき社会的な機能にも配慮する必要があろう．特に，自然空間を再生するに際しては，東京湾の自然がそれと関わる人々が享受できる精神的な価値や人と人の関係性の回復，コミュニティの再生といった側面に十分配慮して整備していくとともに，継続的な管理システムの構築についても同時に検討して必要があると考える．

謝辞:本研究は，港湾空間高度化環境研究センター，羽田周辺水域環境調査研究委員会，NPO 法人海辺つくり研究会の協力を得て，地域の聞取り調査を実施し得られたデータに基づきました．

参考文献

1) 鈴木覚，磯部雅彦：東京湾における生態系サービスの経済的な価値について，海洋開発論文集，pp. 20-33，2007
2) 柿崎京一：近代漁業村落の研究，御茶ノ水書房，1978
3) 若林敬子：東京湾の環境問題史，有斐閣，2000
4) 東京新聞社東京湾取材班：ザ・東京湾，東京新聞社，1996
5) 読売新聞社：東京湾水辺の物語，読売新聞社，1992
6) 鬼頭宏：明治以前日本の地域人口，上智経済論集，第41巻1･2号，pp. 65-77，1996
7) 小川岳人：縄文時代の生業と集落―古東京湾沿岸の社会―，株式会社ミュゼ，2001
8) 菊池利夫：東京湾史，大日本図書，1974
9) 東京府：東京府統計書，1889
10) 神奈川県：神奈川県県治一斑，1888
11) 千葉県：千葉県勧業統計書，1888
12) 岡村金太郎：浅草海苔，博文館，1909
13) 大森漁業史刊行会：大森漁業史，大森漁業組合，1973
14) 柴漁業協同組合史編集委員会，蒼穹の下魚鱗耀きし地，柴漁業協同組合，1989
15) 横山宗一郎：空港のとなり町羽田，岩波書店，1995
16) 東京都内湾漁業興亡史編集委員会：東京都内湾漁業興亡史，東京都内湾漁業興亡史刊行会，1971
17) 藤田弘夫，吉原直樹：都市社会学，有斐閣，1999
18) 東京湾水産資源生態調査委員会：東京湾の漁業と資源その今と昔，漁業情報サービスセンター，2005
19) 吉見俊哉，若林幹夫編：東京スタディーズ，紀伊国屋書店，2005
20) 鳥越皓之，嘉田由紀子，陣内秀信，沖大幹：里川の可能性，新曜社，2006
21) 鬼頭秀一：自然保護を問い直す，筑摩書房，1996
22) クロード S フィッシャー，松本康，前田尚子訳：都市的体験，未来社，1996
23) ロバート D パットナム，柴内康文訳：孤独なボーリング，柏書房，2006
24) 高橋勇悦監修：21世紀の都市社会学，学文社 2002